

(調査資料)

## 特別支援学校（聴覚障害）小学部の国語科指導における コミュニケーション手段と教材活用に関する現状

—「特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段と  
教材活用に関する現状調査」から—

庄 司 美千代

(教育研修・事業部)

**要旨：**独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（以下、「本研究所」と記載）聴覚障害教育研究班では、平成24年度、「聴覚障害教育における教科指導等の充実に資する教材活用に関する研究」において、全国の特別支援学校（聴覚障害）を対象とした質問紙調査を実施した。

本稿では、特別支援学校（聴覚障害）小学部国語科の調査結果と考察を報告する。調査の結果、授業で使用するコミュニケーション手段では、学年の進行に伴い指文字の使用割合が増加し、学習した内容を日本語で確認し定着を図っていることが窺えた。

また、国語科指導における教材活用の使途として、情報保障を目的としたもの、聴覚障害に起因する言語の遅れへの対応を目的としたものが挙げられた。

これらの結果に基づき、特別支援学校（聴覚障害）での授業における教材活用に関する重要事項をまとめた。

**見出し語：**聴覚障害、国語科、教材、小学部

### I. はじめに

聴覚障害教育は、実践を通して培ってきた言語指導法を活かし、保有する聴覚を活用しつつ視覚情報を適切に用いる等の配慮の下に、教育を展開してきた。

現在、特別支援学校（聴覚障害）では、教科指導等を学力向上に結びつけていくことが課題視され、実践研究がなされている（田中・齊藤，2007）。

各学校では、学力向上や教科指導の充実、教科学習を支える言語力を育てる指導法等を研究テーマとして実践研究に取り組んでいる（福島県立聾学校平分校，1995；沖縄県立沖縄ろう学校，2006；愛知県立一宮聾学校，2008）が、教材活用に関する全国的

な調査はなされていない。

教科指導等を効果的に進め、学力の向上を図るためには、教材の果たす役割が重要となる。そこで、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（以下、「本研究所」と記す）聴覚障害教育研究班では、平成24年度に特別支援学校（聴覚障害）を対象として、教科指導における教材活用の現状を把握するため、教材の保有や活用に関する全国調査を実施した。

聴覚障害のある児童は、周囲の音声聞こえない或いは聞こえにくい状況に置かれているため、教科学習を行うために必要な日本語の獲得が困難である。

このため、本稿では、話し言葉から書き言葉の獲得時期である小学部で、日本語指導の中心的役割を

表1 担当学年別回答数

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	重複
回答数	31	27	26	19	17	16	11

有効回答数N = 147

担当国語科に焦点を当て調査結果と考察を報告する。

## II. 調査目的・方法

### 1. 調査名

「特別支援学校（聴覚障害）におけるコミュニケーション手段と教材活用に関する現状調査」

### 2. 調査目的

特別支援学校（聴覚障害）の小学部から高等部の教科指導等におけるコミュニケーション手段と教材活用の実態を調査し、学部や教科毎の現状と課題を明らかにする。

### 3. 対象

平成24年度全国特別支援学校実態調査聾学校の部（全国特別支援学校長会）に掲載されている全国の特別支援学校（聴覚障害）の本校及び分校、計100校。

### 4. 調査時期

平成24年9月から平成24年10月。郵送による質問紙調査とし、平成24年5月1日現在の各学校・学部の実態に関して回答を求めた。

### 5. 調査内容

回答者の担当学年、教育課程等の基本情報、国語科の授業で用いるコミュニケーション手段、国語科で活用する教材の活用頻度、児童生徒の実態に応じて教師が自作した教材や既存の教材の加工の状況等とした。

なお、本調査では、教科等で用いるコミュニケーション手段について、実際の授業場面を想定し、以下の説明を加えた。

- ・聴覚口話：読話・発話と聴覚活用を中心とするコミュニケーション
- ・手話付きスピーチ※：発話を主として日本語コードの手話を同時表現するもの
- ・日本手話：音声日本語とは異なる言語構造や統語規則を持ち、日本で用いられる手話
- ・筆談：黒板や模造紙、画用紙、メモ帳等に語句や文・文章を書いて伝える（板書や絵を描くのも含む。）
- ・キュードスピーチ：口形に子音部の弁別を中心とするキューサインを組み合わせたもの
- ・その他：絵カード、身振り、発音サイン等

※「手話付きスピーチ」については、発話を主とすることから、補聴器や人工内耳による聴覚活用も含まれると考える。

## III. 結果

### 1. 基本情報

#### (1) 回答数

本調査に対して得られた全ての回答数（以下、総回答数）のうち、基本情報に記入漏れ等があったものを除いた回答を有効回答とした。

小学部国語科の有効回答数は147（総回答数161）であった。表1に記入者が担当する学年別の回答数を示した。

#### (2) 国語科の教育課程

表2に記入者が担当する学習グループの国語科の教育課程を示した。

第1学年から第6学年まで、全ての学年において小学校該当学年に準ずる教育課程が76.5%～93.5%と最も多かった。次に、小学校該当学年よりも下学年の教育課程を適応している（以下、「下学年適応」と記す）ものが3.7%～15.8%と多かった。知的障害者を対象とする特別支援学校の各教科を取り入れた

表2 学年別教育課程（数値は%）

有効回答数N = 147

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	重複
N	31	27	26	19	17	16	11
準ずる	93.5	92.6	88.5	84.2	76.5	87.5	9.1
下学年適応	6.5	3.7	11.5	15.8	5.9	12.5	18.2
知的代替	0	3.7	0	0	17.6	0	54.5
自立主	0	0	0	0	0	0	18.2

表3 学年別使用コミュニケーション手段（複数回答,数値は%）

有効回答数N = 147

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	重複
N	31	27	26	19	17	16	11
聴覚口話	71.0	70.4	61.5	63.2	52.9	43.8	63.6
手話付きスピーチ	83.9	77.8	80.8	89.5	88.2	75.0	63.6
日本手話	16.1	3.8	11.1	14.3	11.1	31.3	18.2
筆談	45.2	33.3	30.8	31.6	41.2	31.3	27.3
キュードスピーチ	19.4	14.8	7.7	10.5	5.9	12.5	9.1
指文字	67.7	55.6	65.4	63.2	70.6	81.3	54.5
その他	32.3	22.2	3.8	10.5	5.9	6.3	63.6

教育課程（以下、「知的代替の教育課程」と記す）は、第2学年で3.7%、第5学年では17.6%であったが、他学年では0%であった。

重複障害学習グループでは、知的代替の教育課程が54.5%と最も多く、次いで、下学年適応、自立活動を主とする教育課程が18.2%、小学校該当学年に準ずる教育課程が9.1%であった。

### (3) 国語科の授業で用いられるコミュニケーション手段

回答者が担当する国語科授業で使用するコミュニケーション手段について複数選択で回答を求めた。表3に、学年別の使用コミュニケーション手段を示した。

第1学年から第5学年において手話付きスピーチの使用割合が75.0%~89.5%と最も多く、第6学年は指文字が81.3%で最も多かった。

学年の進行と各コミュニケーション手段の使用割合をみると、聴覚口話は、第1学年が71.0%と最も多く、学年の進行に伴い使用割合が減少し、第6学年では43.8%であった。手話付きスピーチは学年進行による使用割合の変化は見られず、約80%程度で

推移していた。日本手話は、学年の進行による変化は見られず、第5学年まで10%程度で推移し、第6学年で31.3%となっていた。板書を含む筆談の使用割合は、30%~45%で推移していた。キュードスピーチは、5.9%~19.4%で推移していた。指文字は、第4学年まで約60%で推移し、第5学年以降になると70%を超えていた。その他のコミュニケーション手段として、身振り、写真、絵カードが挙げられたが、第2学年まで22.2%~32.3%だが、第3学年以降は10.5%以下となっていた。

重複障害学習グループでは、聴覚口話と手話付きスピーチ、その他（身振り、写真、絵カード等）が63.6%で最も多かった。次いで、指文字の使用が54.5%であった。

## 2. 国語科で使用する教科書等の教材

教科書等の教材のうち、特別支援学校（聴覚障害）で多く活用されることが予想された24の教材を提示し、教材毎に活用の頻度を選択する回答を求めた。表4に低学年（第1学年~第2学年）、中学年（第3学年~第4学年）、高学年（第5学年~第6学年）、重複障害学習グループ別の活用頻度を示した。

表4 国語科で使用する教科書等の活用頻度（数値は%）

有効回答数 N = 147

教材	小学部低学年 (N=58)			小学部中学年 (N=45)			小学部高学年 (N=33)			重複 (N=11)		
	よく活用	時々活用	計	よく活用	時々活用	計	よく活用	時々活用	%計	よく活用	時々活用	計
1 検定教科書	※93.1	1.7	※※94.8	※95.6	4.4	※100.0	※90.9	3	※※93.9	36.4	18.2	54.6
2 聾学校用教科書	13.8	51.7	65.5	13.3	53.3	66.6	9.1	36.4	45.5	9.1	18.2	27.3
3 文部科学省著作教科書(知的障害者用こくご☆～☆☆☆)	0.0	6.9	6.9	0.0	8.9	8.9	0.0	0.0	0.0	9.1	72.7	※※81.8
4 附則の9条本(旧107条本)	0.0	1.7	1.7	0.0	8.9	8.9	3.0	0.0	3.0	18.2	36.4	54.6
5 電子教科書(検定教科書対応)	5.2	10.3	15.5	4.4	17.8	22.2	9.1	6.1	15.2	0	0	0
6 市販のワークブック、漢字ドリル	※82.8	13.8	※※96.6	※82.2	17.8	※100.0	※78.8	12.1	※※90.9	45.5	27.3	※※72.8
7 日本語指導用教材(教科書、問題集)	17.2	27.6	44.8	22.2	57.8	80.0	21.2	36.4	57.6	27.3	27.3	54.6
8 国語辞典、漢和辞典(紙媒体)	25.9	39.7	65.6	53.3	24.4	※※77.7	63.6	30.3	※※93.9	9.1	36.4	45.5
9 電子辞書(国語辞典、漢和辞典)	1.7	3.4	5.1	2.2	4.4	6.6	6.1	21.2	27.3	0	0	0
10 手話辞典(紙媒体、電子媒体)	12.1	51.7	63.8	28.9	44.4	※※73.3	18.2	63.6	※※81.8	9.1	72.7	※※81.8
11 ことば絵じてん	37.9	50.0	※※87.9	33.3	46.7	※※80.0	3.0	48.5	51.5	36.4	54.5	※※90.9
12 図鑑(生活、生き物、乗り物等)	36.2	56.9	※※93.1	22.2	73.3	※※95.5	21.2	63.6	※※84.8	27.3	63.6	※※90.9
13 絵本(行事、物語、説明等)	39.7	55.2	※※94.9	31.1	51.1	※※82.2	12.1	45.5	57.6	63.6	27.3	※※90.9
14 紙芝居(行事、物語、説明等)	8.6	43.1	51.7	6.7	26.7	33.4	3.0	27.3	30.3	18.2	36.4	54.6
15 写真(人物、場所、活動場面等)	46.6	48.3	※※94.9	53.3	44.4	※※97.7	36.4	57.6	※※94	※81.8	9.1	※※90.9
16 動画(ビデオカメラで撮影したもの)	5.2	44.8	50.0	11.1	62.2	※※73.3	3.0	60.6	63.6	0	81.8	※※81.8
17 カレンダー	51.2	37.9	※※89.1	40.0	51.1	※※91.1	33.3	39.4	※※72.7	※72.7	18.2	※※90.9
18 絵日記(スケッチブックの記録等を含む)	46.6	37.9	※※84.5	40.0	22.2	62.2	18.2	27.3	45.5	63.6	27.3	※※90.9
19 新聞	8.6	43.1	51.7	8.9	6.0	68.9	18.2	69.7	※※87.9	9.1	36.4	45.5
20 広告、チラシ、ポスター	1.7	43.1	44.8	6.7	35.6	42.3	3.0	48.5	51.5	0	45.5	45.5
21 雑誌(幼児・児童向け、その他)	3.4	39.7	43.1	4.4	4.0	44.4	3.0	27.3	30.3	0	36.4	36.4
22 DVD(テレビ番組、解説等)	3.4	46.6	50.0	4.4	44.4	48.8	3.0	51.5	54.5	0	36.4	36.4
23 手話・字幕付きDVD	3.4	32.8	36.2	4.4	37.8	42.2	9.1	30.3	39.4	0	27.3	27.3
24 インターネット上のWeb情報	20.7	44.8	65.5	28.9	51.1	※※80.0	30.3	48.5	※※78.8	27.3	54.5	※※81.8

表5 教材の加工や自作の状況

		(N=55)			
		低学年	中学年	高学年	重複
1	情報保障を目的とした加工及び自作 教材例) 手話DVD	0	1	0	0
2	聴覚障害による言語発達の遅れへの配慮・対応を目的とした加工・自作				
(1)	語彙・漢字の読みの定着を目的とした加工・自作 教材例) 新出語句学習プリント、漢字プリント等	5	4	1	1
(2)	教科書本文の内容理解を促すことを目的とした加工・自作 教材例) パネルシアター、教科書本文や挿し絵を拡大したもの、お面やペーパーサート、動作化のための小道具や模型、ライト文等	6	2	3	2
(3)	教科の目標を達成することを目的とした加工・自作 教材例) 自作ワークシート、他検定教科書、作文や感想文の作品集等	2	7	4	0
(4)	教科に関連する言語習得と言語概念の形成を目的とした加工・自作 教材例) 作文ノート、新聞ノート、自作の文法学習用プリント、言葉遊びやクイズのプリント等	7	7	3	0

低学年から高学年までいずれも「よく活用する」の回答数が70%以上だった教材は、「検定教科書」、「市販のワークブック、漢字ドリル」であった。

低学年で「よく活用する」と「時々活用する」を合わせた回答数が70%以上になるのは、「絵本」、「写真」、「図鑑」、「カレンダー」、「ことば絵じてん」、「絵日記」であった。

中学年で「よく活用する」と「時々活用する」を合わせた回答数が70%以上になるのは、「写真」、「図鑑」、「カレンダー」、「絵本」、「日本語指導用教材」、「ことば絵じてん」、「国語辞典、漢和辞典」、「動画」、「手話辞典」、「インターネット上のWeb情報」であった。

高学年で「よく活用する」と「時々活用する」を合わせた回答数が70%以上になるのは、「写真」、「国語辞典、漢和辞典」、「新聞」、「図鑑」、「手話辞典」、「カレンダー」、「インターネット上のWeb情報」であった。

学年別の使用割合の推移を見ると、「国語辞典、漢和辞典」と「手話辞典」、「新聞」は、低学年から高学年にかけて増加していた。また、「ことば絵じてん」、「絵本」、「絵日記」は、低学年から高学年に

かけて減少していた。「聾学校用教科書」は、低学年と中学年でのご使用割合が約65%だが、高学年になると45.5%と減少していた。

重複障害学習グループで「よく活用する」の回答数が70%以上だった教材は、「ことば絵じてん」、「絵本」、「図鑑」、「写真」、「カレンダー」、「絵日記」、「手話辞典」、「文部科学省著作教科書（知的障害者用）」、「動画」、「市販のワークブック、漢字ドリル」、「インターネット上のWeb情報」であった。

### 3. 国語科で使用する自作教材

本調査結果から、児童の実態に応じて教師が教材を自作したり、既存の教材を加工したりする観点として、「情報保障を目的としたもの」と「聴覚障害による言語発達の遅れへの配慮・対応を目的としたもの」が挙げられた。後者は、さらに、(1) 語彙・漢字の読みの定着を目的としたもの、(2) 教科書本文の内容理解を促すことを目的としたもの、(3) 教科（国語科）の目標を達成することを目的としたもの、(4) 教科に関連する言語習得と言語概念の形成を目的としたものにと整理された。表5に、この観点にしたがい低学年、中学年、高学年、重複障害学

習グループ別に記述内容を整理したものを示した。

まず、「情報保障を目的としたもの」についてであるが、これは、聴覚障害により音声言語の聴取が困難なため、教科書本文にルビを付けたり、教科書本文を手話で表現した映像を用いたりするものである。小学部の回答では、手話付きDVDの記述が見られた。手話を主なコミュニケーション手段とする児童に対し、教科書本文の意味を手話表現で理解させた後、教科書本文の日本語の理解や定着を図る指導が行われていることが考えられる。

次に、「聴覚障害による言語発達の遅れへの配慮・対応を目的としたもの」について述べる。聴覚障害による言語聴取の困難さから、聴覚障害者である児童生徒を対象とする特別支援学校では、教科指導を行う際に、教科目標の達成と併せて、教科学習の基礎となる言語習得も図ることとされている（文部科学省，2009）。小学部の回答では、言語発達の遅れへの配慮や対応として、以下の4点が挙げられた。

### **(1) 語彙・漢字の読みの定着を目的とした加工及び自作**

小学部低学年や中学年では、教科書の教材文を読む際に難解と思われる語句や新出語句の意味理解と定着を意図した学習プリントや言葉のノート等を作成し、単元の事前に扱ったり、家庭学習や復習で扱ったりする記述が複数見られた。

高学年では、難語句の復習や短文作りのためのプリントやノートを用意し、定着を図る記述が見られた。

重複障害学習グループでは、ひらがなの文字、単語の学習のための自作プリントの記述が見られた。

### **(2) 教科書本文の内容理解を促すことを目的とした加工及び自作**

小学部低学年では、教科書の挿絵や動作化のためのお面、小道具、模型、ペープサートを用いて内容の理解を図る記述が見られた。

全学年を通して、挿絵以外の絵や写真も加えて提示する、導入時に教科書本文の内容をつかむためのリライト文を作成・提示する記述も見られた。

重複障害学習グループでは、リライト教材文、パネルシアターの活用に関する記述が見られた。

### **(3) 教科（国語科）の目標を達成することを目的とした加工及び自作**

小学部低学年では、登場人物のしたことと気持ちなどをまとめるワークシート、中学年、高学年では、出来事の順序をまとめる、文の構成を把握することをねらったワークシートの作成、板書と同様式のワークシートの作成、学習した読解の仕方を習熟させるための自作の読解プリントに関する記述が見られた。

### **(4) 教科に関連する言語習得と言語概念の形成を目的とした加工及び自作**

小学部低学年では、日常生活で用いる単語の理解と定着を図るための自作プリントやドリル、絵日記や日記の読み書きの取組、動詞や形容詞の活用や助詞の習熟を図る自作プリントに関する記述が見られた。

中学年・高学年においても、単語の理解、作文、文法事項の学習に関する記述が見られたが、題材が生活場面から新聞や作文集、感想文集等へ広がっていた。また、文法指導に関して、校内で統一したテストを作成している記述が見られた。

## **VI. 考察**

本調査の結果から、特別支援学校（聴覚障害）小学部の国語科指導における教材活用とコミュニケーション手段の実態について考察する。

まず、特別支援学校（聴覚障害）小学部における国語科の授業で用いられる教材では、いずれの学年も検定教科書を中心としながら、市販のワークブック、漢字ドリルを日常的に活用し、教材文の種類や特徴に応じて、内容理解を促すための絵や映像、図鑑類、辞典を活用している状況が見られた。特に、低学年では絵や映像に関する教材が多く用いられ、高学年は辞書や新聞など日本語で書かれた教材の活用割合が増加していた。

次に、国語科の授業で用いられるコミュニケーション手段を見ると、手話付きスピーチを中心としながら、指文字や板書を含む筆談も活用して授業を進めており、特に、指文字は、学年進行に伴い使用

割合が増え、指導者が、教科書を用いた指導でやりとりされる意味や内容と併せて、日本語の正しい表記を身に付けさせることを意識しているものと考えられる。小学部低学年において2～3割程度用いられている身振りや写真、絵カードといったその他に属するコミュニケーション手段が中学年以降減少していくこと、また、よく活用する教材のうち、「ことば絵じてん」、「絵本」「絵日記」は、高学年になるほど使用割合が減っていることから、低学年では絵や映像なども活用して教科書本文の内容を理解させ、学年の進行に伴い、言葉による説明を通して新出語句や文章の意味を理解させていく指導に移行していると考えられる。

聴覚障害のある児童の場合、教科書本文で使用される語句や文が習得されていないことも多い。このため、例えば「ゴミ収集車」や「ゴミを積む。」などの語句・文の意味を絵や映像を用いて伝えることはできる。しかしながら、児童に絵や映像を見せただけでは見た物の名称や動詞、文章表現が身に付くわけではない。絵や映像で理解したことが日本語の表記としても理解されることが必要である。このため、低学年段階で絵や映像を示し、児童が理解したこと、イメージしたこと、考えたことに対して指導者が実際の授業場面で言語化する手立てを検討する必要がある。

国語科における教材の加工や自作について、小学部では、「情報保障を目的としたもの」の記述はあまり見られず、「聴覚障害による言語発達の遅れへの配慮・対応を目的としたもの」が多く挙げられた。

語彙・漢字の読みの定着を目的とした加工及び自作の状況から、教科書の教材文の指導に入る前に、児童にとって難解と思われる語句や表現、内容をあらかじめ指導者が把握し、事前指導として国語科のみならず他教科、自立活動をはじめ、学校生活の様々な場で取り上げていく必要性が示唆される。また、教材文を通して学習した語句や表現の定着や習熟も同様に必要となる。このことから、教材文の指導にあたっては、事前から事後の指導に至るまで、他教科や自立活動等との関連をもたせた意図的な指導の在り方を検討していく必要がある。

さらに、教科書本文の内容理解を促すことを目的

とした教材では、絵や動作化に必要な小道具や模型などが活用されていた。実際の授業では、前時の振り返り、今日学習することやめあてなどの確認、読み取りや話し合い活動、学習のまとめや振り返りといった展開がなされるため、授業の展開に沿ってどのような教材活用が有効であるのかを検討していく必要がある。

従前より聴覚障害教育では、教材文や絵本などを読み聞かせる際に、主語の省略や倒置法、体言止め、難語句など、聴覚障害児にとって難しい表現は、主語や述語を補ったり、語順を変えたり、既知の語句に置き換えたりするなど、表現を修正することも行ってきた。本調査においても、自作教材でライト文の活用に関する記述が見られた。本調査では、実際にどのような書き換えをしているのかまでは質問しなかったため、今後、具体的な教材文を取り上げ、書き換える際の指導者の意図や活用方法を検討していく必要がある。

教科としての国語科の目標を達成することを目的とした教材として、ワークシートの自作が多く記述されていた。記述で見られた「出来事の順序」をまとめる、「文の構成」を把握するなど、国語科の目標達成を意図したワークシートとして必要な内容について、今後、具体的な教材文を取り上げ検討していく必要がある。

教科に関連する言語習得と言語概念の形成を目的とした教材については、学年の進行に伴い、日常生活から他人の経験や新聞へと題材を拡げながら、単語、文、文法事項の理解と定着を意図した記述が多く見られた。聴覚障害児の言語概念の形成は、聴覚障害教育の重要課題の一つであり、教材文の指導と関連して検討していく必要がある。

## Ⅶ. まとめ

本調査では、特別支援学校（聴覚障害）小学部国語科の指導における使用コミュニケーション手段と教材活用の実態を明らかにした。本調査の結果、小学校検定教科書の使用を中心としながら、聴覚障害に起因する言語聴取の困難さや言語発達の遅れに対応した教材活用がなされていた。また、使用するコ

コミュニケーション手段や活用される教材では、教材文の語句や文の意味を絵や映像など視覚を通して理解させながら、徐々に言葉による説明によって理解させる指導に移行していることが窺えた。

教材活用を考えるにあたっては、授業の展開に沿って検討することが必要であり、実際の授業を通して検討すべき事項を取り上げた。今後の教材活用に関する実践研究においては、これらの視点を踏まえて進めていきたい。

## 引用文献

愛知県立一宮聾学校（2008）. 生徒が主体的に取り組む授業実践と理解を促すための教材教具の工夫.愛知県立一宮聾学校算数・数学研究班,研究・研修のまとめ.  
福島県立聾学校平分校（1995）. コミュニケーションの能力をより高めるための効果的な指導法の研究全職員

校内研究〈第2年次〉研究収録.

文部科学省（2009）. 特別支援学校学習指導要領解説総則等編（幼稚部・小学部・中学部）第2章第3聴覚障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校, p230-233.

沖縄県立沖縄ろう学校（2006）. 児童の語彙力の向上とコミュニケーション力の向上をめざした教材作成と授業実践, 沖縄ろう学校小学部研究紀要.

田中耕司・斎藤佐和（2007）. 聴覚障害児の書記表現力の指導に関する調査.特殊教育学研究, 45(3), 137-148.

## 参考文献

庄司美千代・原田公人・藤本裕人・横尾俊（2013）. 聴覚障害教育における教科指導等の充実に資する教材活用に関する研究（平成24年度）研究成果報告書, 1-32.

# Communication methods and teaching materials for teaching Japanese at elementary special needs schools for hearing impaired children -Survey on the state of communication methods and the use of teaching materials at special needs school for children with hearing impairment-

SHOJI Michiyo

(Department of Teacher Training and Collaborative Projects)

A questionnaire survey was conducted during fiscal year 2012 by the Department of Education for Children with Hearing Impairment in the National Institute of Special Needs Education (NISE) at all special needs schools for hearing impaired children in Japan. Children taking part in Japanese language classes in the elementary school section participated in the study. Teaching materials were used for providing information and for dealing with language delays caused by hearing impairments. As the grade progressed the

use of finger spelling as a communication method in the class increased. This survey indicated that children were examining the content they had learned in Japanese, and were trying to understand it. Based these results, critical factors in using teaching materials at special needs schools are reviewed.

**Key Words:** hearing impairment, Japanese language class, teaching materials, elementary sections

